

「音韻」とは何か

阿久津 智

1. はじめに

小論のタイトルは『「音韻」とは何か』であるが、『「音韻」とは何か』について考える前に、一般に「〇〇とは何か」という場合、どんなことを述べるものなのかに触れておきたい。

「〇〇とは何か」というタイトルをもつ著作は多い。試みに、「国立国会図書館サーチ」の「詳細検索」（タイトル=とは何か、出版年=2020、データベース・資料種別・所蔵館=すべて選択）で検索したところ、2020 年に出版されたものだけで、「検索結果」に 1,112 件現れた（閲覧日：2021 年 1 月 17 日）。こういった著作にどんなことが書かれているかを知るために、「横浜国立大学図書館蔵書検索ページ」の「詳細検索」（資料選択=図書、タイトル=とは何か、出版年月の範囲指定=2020 年 1 月～2020 年 12 月）で現れた著作（50 件）の「要旨」を見てみたところ、たとえば、次のようなものがあった（閲覧日：2021 年 1 月 17 日）（なお、「国立国会図書館サーチ」には、「要旨」は載っていない）。

(01) 本書は、国際政治学の最前線の成果を生かして科学的に国家間戦争や内戦を論じ、多くの疑問に答える。そして緊張を増す東アジアの現状を踏まえ、日本の安全保障などの展望も示す。歴史やイデオロギーから一定の距離を置き、データ分析から実証的に国際情勢と戦争の本質に迫る試み。（多湖淳『戦争とは何か：国際政治学の挑戦』中央公論新社 2020）

(02) 武道はスポーツ？ コンピューター・ゲーム（e スポーツ）もスポーツ？ サッカーってどういう意味？ バレーボールは？ ドッジボールとロサンゼルス・ドジャースの関係は？ スポーツの意味がわかれば、世界が広がる。（玉木正之『今こそ「スポーツとは何か？」を考えてみよう!』春陽堂書店 2020）

(03) 本書は、著作権を専門とする弁護士が、その基礎や考え方をシェイクスピア、ディズニー、手塚治虫などの豊富な実例でわかりやすく解説。（福井健策『著作権とは何か：文化と創造のゆくえ 改訂版』集英社 2020）

(04) 「テロ」。政治的暴力の真実。我々にも決して無関係ではありえない。理論

View metadata, citation and similar papers at crossref.org

throughout to you by COBE

何か：〈恐怖〉

を読み解くリテラシー』慶應義塾大学出版会 2020）

(05) 学校制服は時代を映し出す鏡だ。その歴史の水脈を辿り、学校制服に内在する文化や社会、政治、経済、科学に関連する「思想」を考察する、刮目の書！（小林哲夫『学校制服とは何か：その歴史と思想』朝日新聞出版 2020）

(06) 精神分析において女性はどうに考えられてきたのか。フェミニズムと精神分析の歴史、臨床における女性性、日本の精神分析、さらにはラカン派の女性論まで。現代女性のこころを理解するために、精神分析における女性

性の変遷を辿る。(西見奈子編『精神分析にとって女とは何か』福村出版 2020)
(07) 成人式の歴史を振り返りながら、社会におけるその意味と今後の展望を多角的に検討、成人式に関わる多くの人々への手引きともなる一冊。(田中治彦『成人式とは何か』岩波書店 2020)

(08) 本書では、サンスクリット原典の徹底的な精読を通じて、「諸経の王」とも称される仏典の全体像を描き、平等な人間観に貫かれた教えの普遍性と現代的意義を示す。(植木雅俊『法華経とは何か：その思想と背景』中央公論新社 2020)

こうしてみると、「〇〇とは何か」という文章では、「〇〇」の「本質」(01・04)、「全体像」(08)、「意義」(08)、「歴史」(05・07)、「変遷」(06)、「展望」(01・07)、「考え(方)」(03・06)、「思想」(05)など、広く、その内容について書かれるのが一般的なようであるが、(02)のように、「〇〇」という語の「意味」(範囲)を取り上げているものも見られる。まとめてみると、「〇〇とは何か」には、主に、次のようなものがあるといえよう。

- ①「〇〇」という語の意味(範囲)
- ②「〇〇」という語が指し示すものの内容
 - 1 「〇〇」の概要(本質・意義)
 - 2 「〇〇」の変遷(歴史・展望)
 - 3 「〇〇」に関するとらえ方(考え方・思想)

このうちの②は、①を前提とするものと思われる{内容について述べるには、まずその語の指し示すもの(意味)が定まっている必要があるだろう}。いってみれば、①は、国語辞典の記述内容のようなもので、②は、百科辞典(専門辞典)の記述内容のようなものであろう。

本稿では、以下、これに合わせ、『音韻』とは何かについて、まず、①「音韻」という語の意味(2節)を概観し、つづいて、②「音韻」という語が意味するもののうち、「言語音」(専門的な概念)に関するものの内容(概要・変遷・とらえ方)について、日本語学におけるもの(3節)、言語学(音韻論)におけるもの(4節)、漢語(中国語)音韻学におけるもの(5節)の3つに分けて、見ていきたい。これらに関しては、筆者は、すでに、個別・部分的に発表してきているが、それらを踏まえて、まとめてみたい。

2. 「音韻」という語の意味

2. 1 現代日本語における「音韻」の意味

まず、現代語の「音韻」について見てみると、現代の国語辞典に共通して載っているのは、「実際の発音から抽象された、語の意味の区別に役立つ単位としての音。」(『新選国語辞典 第九版』小学館 2011「音韻」)というような(言語学の専門語としての)意味である。これが、今日における「音韻」の最も一般的な意味だと思われる。実際の言語資料(コーパス)に当たってみても、この意味で使われているものが多数を占めている(阿久津 2016: 26)。以下に例を挙げる(「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の検索結果による。下線、および、[]内は筆者による。以下同じ)。

(09) 仮名という文字は、平安時代以後に変化したり新しく発生したりした音韻〔単位音（音節）〕に対応する記号をいちいち創作することはせず、既存の字母を工夫することで済まそうとしてきた傾向が強い。（佐藤喜代治ほか編『漢字百科大事典』明治書院 1996）

(10) これは現代語の音韻〔単位音（音節）〕に従って書き表すことを原則としますが、表記の慣習を尊重して、一定の特例が設けられています。（「Yahoo! 知恵袋」2005）

これらの「音韻」は、日本語の基本的な単位音である「音節」（syllable）を意味する〔正確には、（単独では音節を構成しない）撥音（「ン」）や促音（「ッ」）などを含むため、「モーラ」（拍）と呼ぶべきものであるが、本節では、便宜的に、「音節」としておく〕。

ほかに、「音韻」には、「音とひびき。また、その調和。音色。」「漢字の表わす一音節の頭初の子音とそれを除いた後の部分。音（声母・頭子音）と韻（韻母）。」（『日本国語大辞典 第二版』小学館 2000-2002「音韻」といった意味もある。こちらの例を挙げておく（「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の検索結果による）。

(11) 鶏が鳴く、「東」と枕詞にもいうように、夷曲の言葉の意味も音韻〔音の響き〕も、人々の歌というよりは、何か異類の声のように聞えてくる。（福田百合子『鵜を抱く女』毎日新聞社 1989）

(12) 今日までにペルシア人が用いた詩形には、音律（リズム）については約三〇、音韻〔詩の韻律〕（頭韻・脚韻）については約六つの形が区別される。（オマル・ハイヤーム、小川亮作訳『ルバイヤート』岩波書店 1993）

(13) 漢詩文の困難は漢字・漢語の正しい知識の外に音韻〔漢字音〕に関する深い理解を必要とすることにある。（福尾猛市郎『大内義隆』吉川弘文館 1989）

2. 2 「音韻」の語誌

2. 2. 1 中国語における「音韻」の語誌

つづいて、語誌的に「音韻」を見ていくと、この語は、中国に起源をもつ語で、原義は「音楽的に調和した美しい音」であったと思われる。ここから、「音の響き」、「詩の韻律」、「漢字音」などの意味が生まれたようである（阿久津 2017b: 184-186）。

中国語の（大型の）辞典では、「音韻」の意味を 3 つに分けている。『漢語大詞典』（上海辞書出版社 1986-1994「音韻」）には、①「抑揚頓挫的和諧声音。」〔めりはりがあつて調和した音。〕、②「指文学作品の音節韻律。」〔文学作品のリズムや韻律を指す。〕、③「漢字字音中声母、韻母、声調三要素の総称。」〔漢字字音中の声母・韻母・声調の三要素の総称。〕とある。以下に、古代中国語の例を挙げておく（「中国哲学書電子化計画」、「漢籍電子文献資料庫」による。漢字の字体は、現代日本語の通用字体に統一する。以下同じ）。

(14) 暢随宜応答，吐属如流，音韻詳雅，風儀華潤，〔張暢は適切に応答し、話しぶりは流れるようで、「音韻」（声の響き）は優雅で、身のこなしは華麗であり、〕（沈約等撰『宋書』卷五十九「張暢伝」488）

(15) 一簡之内，音韻尽殊；両句之中，輕重悉異。〔1 節のうちで、「音韻」（詩の

韻律)はすべて異なり、2句の中で、軽重はすべて異なる。](沈約等撰『宋書』卷六十七「謝靈運伝」488)

(16) 自茲厥後、音韻鋒出、[これより後、「音韻」(音韻学=漢字音の研究)が盛んに出て、](顔之推『顔氏家訓』卷下「音辞篇」600頃)

(17) 夜永酒闌、論及音韻。[夜は更け、酒はたけなわになり、論は「音韻」(漢字音)に及んだ。](陸法言等撰『切韻』「序」601)(『大宋重修広韻』1008による)

(18) 施之金石、則音韻和諧。[これを金属や石に施せば、その「音韻」(音の響き)は調和する。](魏徵等撰『晋書』卷五十一「摯虞伝」646)

「音韻」のこれらの意味は、現代中国語にも見られる(阿久津 2020c: 11)。以下に例を挙げる{「BCC 語料庫」の検索結果による。このほかに、ウーロン茶の「鉄観音(の味や香り)」を意味する「音韻」の例も見られた}。

(19) 如行雲流水的琵琶音韻。[行雲流水のごとき琵琶の「音韻」(音の響き)。](劉定堅『刀劍笑』2001)

(20) 忽然耳畔伝来游采般歌声、音韻凄惋、[突然耳元に采遊のような歌声が伝わってきて、その「音韻」(声の響き)は細く悲しげで、](亦舒『痴情司』1990)

(21) 就不会把七絶仿成了音韻不協的打油詩。[そうすれば、七言絶句を「音韻」(詩の韻律)の合わない「打油詩」に似せることはないだろう。](微博)

(22) 漢語言曾在字体、音韻上經歷多次的变化和發展、[中国語は、これまで字体や「音韻」(漢字音)において、多くの変化や発展を経てきているが、](科学文献)

(23) 他著述、治学領域寛広、於經学、音韻、文字、歴史考証、金石、天文曆算等方面均有高深造詣。[彼(銭大昕)は著述し、研究領域は広く、經学・「音韻」(音韻学)・文字・歴史考証・金石・天文曆算等の方面においても、等しく深い造詣をもっていた。](科技文献)

2. 2. 2 日本語における「音韻」の語誌

「音韻」という語は、こういった意味とともに、奈良～平安時代初頭に、日本に伝来したようである(阿久津 2017b: 190)。以下に、古代日本語の例を挙げておく(「国立国会図書館デジタルコレクション」などによる)。

(24) 並^ビ尽^クス^ニ雅妙ノ之音韻 [詩の韻律]ヲ^ニ之始^メナリ也。近代ノ歌人、雖^モ長ク^ト歌句^ニ、未^レ知^ラニ音韻 [詩の韻律]ヲ^ニ。(藤原浜成著『歌経標式』772)(訓点は、沖森卓也ほか『歌経標式: 影印と注釈』おうふう 2008: 162 の読みに基づく)

(25) 通霄砧杵未^レ為^レ足。音韻 [音の響き] 埴簾不^ニ相讓^ニ。(良岑安世ほか編『経国集』卷十三・巨勢識人「奉和搗衣引」827頃)(上田万年ほか監修『新校 群書類従 第六卷』卷第百廿五「文筆部」内外書籍 1931: 165)

(26) 誦^{シテ}ニ兩京之音韻 [漢字音]ヲ^ニ。改^ムニ三吳之訛響ヲ^ニ。(空海『性靈集』卷四「為藤真川挙浄豊啓」835頃)(祖風宣揚会編『弘法大師全集 第三輯』卷十 吉川弘文館 1911: 451)

(27) 次ニ一僧^へ作梵^ヲ。如来妙色身等ノ両行ノ偈^へ、音韻〔漢字音〕共ニ唐ト一般ナリ。(円仁『入唐求法巡礼行記』巻二 838-847) (円仁『入唐求法巡礼行記 第二』東洋文庫 1926: 31 ウ。訓点は、足立喜六訳注『入唐求法巡礼行記 1』平凡社 1970: 202 の読みに基づく)

(28) 即令^ニ学生四百人^{ヲシテ}習^ハ五經三史。明法算術。音韻〔音韻学〕籀篆等ノ六道^ヲ。(三善清行『意見十二箇条』「請加給大学生徒食料事」914) (上田万年ほか監修『新校 群書類従 第二十巻』巻第四百七十四「雑部二」内外書籍 1929: 684)

「音韻」は、その後、日本において、用法が拡大する。悉曇学(梵語・梵字の研究)や、中国の音韻学(とくに『韻鏡』)の影響で、「音韻」は、「音(子音)+韻(母音)」と、分析的に解釈されるようになり(鎌倉時代)、漢字音だけでなく、日本語音(および、他の言語音)にも用いられるようになった(江戸時代)。やがて、「音韻」には、単位音(個別音・分節音)を表す用法が見られるようになり、とくに「音+韻」を一覧にした「五十音図」における個々の音節(五十音)を指すようになる(明治初期)(阿久津 2019: 238・阿久津 2020a: 12-13)。さらに、「音韻」は、西洋の言語学における領域や概念にも当てられ(以下、原語は英語で代表させる)、それは、orthography(正書法)や phonetics(音声学){における音声(の種類)}から(明治中期)、phonology(音韻論){における単位音(音素など)}へと移行し(昭和初期)、ここに至って、今日の(国語辞典に見られる)「音韻」の用法が確立した(阿久津 2018b)。以下に例を挙げておく(「国立国会図書館デジタルコレクション」などによる)。

(29) 京都中国板東北国等の人に逢て其^{おんゐん}音韻〔音声〕を聞に^{すべ}総て四音^{ふんべん}の分弁なきがごとし(鴨東蕨父『仮名文字使 蜷縮涼鼓集 上』「凡例」1695 刊)

(30) 文ヲ為シ辞ヲ成スニハ上ノ二十六ノ文字ヲ二字或三四字以上ヲ連合シテ音韻〔音節〕^{カナ}ヲ諧^ヘ諸々ノ文辞言語ヲナスナリ 其連合シテ音韻〔音節〕ヲナスヲ「シルラーベン」ト云フ(大槻玄沢『蘭学階梯 下巻』「配韻」1788 刊)

(31) 母音子音ヲ連タル図ヲ五十連音図ト云フ 此図ハ豎ノ五字ヲ音トシ横ノ十字ヲ韻トス〔中略〕此五十ノ音韻〔音節〕ハ縦横ニ通ジ万変ニ応ズルモ各其格ニ從テ混乱錯雑スルコトナシ(物集高見『初学日本文典 上』出雲寺万次郎 1878: 7 ウ・8 オ)(母音: ア行音、子音: カ〜ワ行音)

(32) 母韻・父音・子音・拗音等にワタッテ、一タダシイ音韻〔音声〕ヲサツケルト同時ニ、各地方ノ訛音ヲ矯正スル方法ヲモシメシ、カツ各種ノ発音練習法ヲアゲテアル。(伊沢修二『視話応用 国語発音指南』金港堂 1902: 緒言 1)

(33) 近來の phoneme が漸くイギリス人の語学教授にも術語として入つて來たけれども、邦人はまだ之を音韻〔音素〕と訳すことにさへ気がつかずにゐるではないか。(金田一京助「言語学原論を読む」『民族』3・3 民族発行所 1928: 130)

これらの「音韻」は、(大型の)国語辞典には、「(漠然と)言語音をいう。」「言語

学で、具体的な音声から音韻論的な考察を経て抽象された言語音をいう。」(『日本国語大辞典 第二版』) などとして収録されている。このような意味は、中国語の辞典には載っておらず、中国語の文献にも用例がほとんど見られないため、日本語に特徴的なものと思われる(阿久津 2020c: 11, 22)。

ここまで見てきたことを、表 1 にまとめておく。

表 1 「音韻」の意味

『日本国語大辞典 第二版』	『漢語大詞典』	用例 (日本語)	用例 (中国語)
①音とひびき。また、その調和。音色。	①抑揚頓挫的和諧声音。[めりはりがあって調和した音。]	11・25 音の響き	14・20 声の響き 18・19 音の響き
	②指文学作品の音節韻律。[文学作品のリズムや韻律を指す。]	12・24 詩の韻律	15・21 詩の韻律
③漢字の表わす一音節の頭初の子音とそれを除いた後の部分。音(声母・頭子音)と韻(韻母)。	③漢字字音中声母、韻母、声調三要素の総称。[漢字字音中の声母・韻母・声調の三要素の総称。]	13・26・27 漢字音 28 音韻学	17・22 漢字音 16・23 音韻学
②(漠然と)言語音をいう。		29・32 音声	
④言語学で、具体的な音声から音韻論的な考察を経て抽象された言語音をいう。		09・10・30・31 音節 33 音素	

『日本国語大辞典 第二版』の②と④に当たる「用例 (日本語)」は、明確に二分しにくいいため、併せて示す。

本節の最後に、「言語音」を表す「音韻」について、中国語と比べる形で、日本語における特徴をまとめておく(阿久津 2020c: 23)。

- (a) 中国語の「音韻」が、主に漢字音(中国語音)に限られるのに対し、日本語の「音韻」は、日本語を含め、広く諸言語の音に使われる。
- (b) 中国語の「音韻」が、体系や学問を表すことが多いのに対し、日本語の「音韻」は、言語音全体を表すほかに、単位音(個別音・分節音)を表すのに使われることが多い。

3. 日本語学における音韻

3 節～5 節では、「音韻」の意味を、(専門語として)「言語音」を表すもの(『日本国語大辞典 第二版』の「音韻」の意味のうち、②～④に当たるもの(表 1 参照))に限って、その内容を見ていく。

3. 1 日本語学における音韻の概要

日本語学では、五十音図(あるいは、これに、濁音や拗音などを加えた「拡大五十音図」)の各音(モーラ・拍)を「音韻」と呼ぶことが多い。日本語学の専門辞典に

は、『音韻』は広義には、アクセント、イントネーションを含むが、狭義にはそれらを除外した『ア』『イ』『カ』『キ』などの音を意味する。』（『日本語学研究事典』明治書院 2007: 89）などとある。モーラを「音韻」と呼ぶのは、五十音図の各行の子音を「音」、各段の母音を「韻」と呼ぶことから来ている（この呼び方は、『韻鏡』に由来するようである。悉曇学では、「声」と「韻」を使うことが多い（阿久津 2019: 245-246））。

明治中期までは、（本居宣長の影響で）「五十音」{(広義の) 清音}のみを「正音」と認めて、「音韻」と呼ぶことが多かったが、しだいに、これ以外のもの（濁音・半濁音・拗音・撥音・促音・長音など）も、日本語の「音韻」として、同等に扱うようになった（阿久津 2017c: 35・阿久津 2018c: 347）。明治中期の日本文典（日本語文法教科書）（34・35）と、現代の参考書・概論書（36・37）には、「音韻」に関して、たとえば、次のような説明が見られる。

- (34) 我国の言語を言ひあらはす音韻はその数五十にして、これを文字に書きあらはし、経緯を乱さず連ねたるを五十音図といふ。[中略] 右の五十音を、あいうえお、かきくけこ、とやうに、経に読み下すを音といひ、あかさたなはまやらわ、いきしちにひみいりゐ、とやうに、緯に読み上すを韻といふ。（大宮宗司『初等教育 日本文典』博文館 1894: 2-4）
（二重線は原文のもの）

- (35) 音韻を大別して、清音、鼻音、濁音、半濁音、拗音、促音、引音の七種となす。（杉敏介『中等教科 日本文典』文学社 1898: 3）（鼻音：撥音）

- (36) 日本語（標準語）の音韻は、次の百三種類である。
アイウエオ／カキクケコ キャキュキョ／ガギグゲゴ ギャギュギョ／
サシスセソ シャシュショ／ザジズゼゾ ジャジュジョ／
タチツテト チャチュチョ／ダ デド／ナニヌネノ ニャニュニョ／
ハヒフヘホ ヒャヒュヒョ／バビブベボ ビャビュビョ／
パピプペポ ピャピュピョ／マミムメモ ミャミュミョ／ヤ ュ ヨ／
ラリルレロ リャリュリョ／ワ／ン（撥音）／ッ（促音）／ー（長音）
（峰高久明ほか『中学総合的研究 国語 改訂版』旺文社 2009: 152）（／は改行を示す。以下同じ）

- (37) 外国語を借用して日本語に用いる場合、日本語の音韻に同化させた語形が用いられるのが原則であるが、次のように、その外国語の発音に応じて外来語だけに適応される音韻、ならびにそれを書き表す特有の表記もある。[中略]
[ʃe]「シェ」／[ʒe]「ジェ」／[tʃe]「チェ」／[tsa]「ツァ」／
[tse]「ツェ」／[tso]「ツォ」／[ti]「ティ」／[di]「ディ」／
[ɸa]「ファ」／[ɸi]「フィ」／[ɸe]「フェ」／[ɸo]「フォ」／
[du]「デュ」（沖森卓也「語の構造と分類」沖森卓也編著『語と語彙』朝倉書店 2012: 12）（語例は省略）

3. 2 日本語学における音韻の歴史

日本語音韻史の詳細については、その分野の専門書や概説書に譲るとして、ここで

は、日本語の研究において、音韻の歴史は、五十音図（の音韻体系）を基準に記述されてきたことについて、触れておきたい。

今日の古典文学学習などに使われる五十音図は、「い」（ア行・ヤ行）、「え」（ア行・ヤ行）、「う」（ア行・ワ行）が重複しており、実数で（清音で）47音であるが、これは、「いろは歌」（10世紀末以降の成立か）で区別される文字（音節）の数（を五十音図に当てはめたもの）である（五十音図は、その成立当時（11世紀ごろ）の日本語の音韻体系をそのまま示すものではない）。日本語音韻史において、日本語の音韻（音節・モーラの種類）の変遷は、この47音、あるいは、10世紀半ばごろまで残っていた、ア行の「え」（衣）とヤ行の「え」（江）の区別も取り入れた48音を基準に整理されることが多い。38は、日本語史（分野別）の概説書に見えるものである。

(38)

[上代]						旧組織（平安中期）						新組織（室町時代）								
ア	イ	ウ	衣	オ		あ	い	う	衣	お	→	あ	い	う	え	お	や	ゆ	よ	わ
カ	㊦	ク	㊧	㊨		か	き	く	け	こ		か	き	く	け	こ	きゃ	きゅ	きょ	くわ
サ	シ	ス	セ	㊩		さ	し	す	せ	そ		さ	し	す	せ	そ	しゃ	しゅ	しょ	
タ	チ	ツ	テ	㊪		た	ち	つ	て	と		た	ち	つ	て	と	ちゃ	ちゅ	ちょ	
ナ	ニ	ヌ	ネ	㊫		な	に	ぬ	ね	の		な	に	ぬ	ね	の	にゃ	にゅ	にょ	
ハ	㊬	フ	㊭	ホ		は	ひ	ふ	へ	ほ		は	ひ	ふ	へ	ほ	ひゃ	ひゅ	ひょ	
マ	㊮	ム	㊯	モ		ま	み	む	め	も		ま	み	む	め	も	みゃ	みゅ	みょ	
ヤ		ユ	江	㊰		や	○	ゆ	江	よ		ら	り	る	れ	ろ	りゃ	りゅ	りょ	
ラ	リ	ル	レ	㊱		ら	り	る	れ	ろ										
ワ	ヰ		エ	㊲		わ	ゐ	○	ゑ	を										

[濁音・特殊音素は省略されている。「上代」の○は、上代特殊仮名遣いで「二群の仮名を使い分ける音」。]

(肥爪周二「音韻史」沖森卓也編『日本語史概説』朝倉書店 2010: 9, 21)

3. 3 日本語学における音韻のとらえ方

ここまで見てきたように、日本語の研究において、日本語の音韻は、五十音図を基に考えられてきた。五十音図は、江戸時代中期以降、「日本語の音韻の図」と考えられるようになり（馬淵 1993: 62-63）、これ以降、国学の著作や日本文典などに、「五十音至上主義」ともいうべき言説が見られるようになる。

「五十音図」という呼称は、契沖に始まるとされるが、契沖は、五十音を普遍的なもの（「すべての言語・すべての音はこの五十音で表わせる」）と見ていたようである（馬淵 1993: 48-49）。その後、本居宣長が、「皇国語観ともいうべき言語観」に立ち、これを日本語の音としてとらえ、「自分の持っている音韻は正とし、外国の音は不正とした」（馬淵 1993: 76-77）。こういった、国学における言語観の影響から、明治中期ごろまで、日本文典などには、「五十音（清音）を日本語の基本的な音韻（正音）と見て、それ以外の音は、五十音の変化したもの（音便・変音など）と見なし、その他の音韻変化現象（延約・通音など）も、その延長上に考える」という音韻観が見られる（阿久津 2017c: 32）。宣長の著作（39・40）と日本文典（41・42）から引用する（「国立国会図書館デジタルコレクション」による）。

(39) 古言ノ正音ハタゞ四十七ニシテ。ヤノ^{クダリ}行ノイ エト。ワノ行ノウトヲ加フ

レバ。^{スベ}都テ五十ナリ。〔割注略〕是ニカノ行サノ行タノ行ハノ行ノ濁音。合セテ二十ヲ加フレバ。都テ七十ナレドモ。濁音ハタゞ清音ノ変ニシテ。モトヨリ別ナル者ニ非ル故ニ。皇国ノ正音ニハ。是ヲ別ニハ立ズ。清音ニ撰スルモノナリ。(本居宣長『漢字三音考』「皇国ノ正音」1785刊)(二重線は原文では□。40・41・54も同じ)

(40) 上件音便。イトウトント^{ツマ}急促ル声トハノ行ノ半濁音ト凡テ五ツニシテ。此

外ハアルコトナシ。〔割注略〕然ルニ漢字音ノ韻モ亦イトウトント^{ツマ}急促ル声ト四ツニシテ。ハノ行ノ半濁音モ韻ニハ非レドモ。コレ亦漢国ノ音ニ多ケレバ。

凡テ五ツニシテ。音便ノ五種全ク是ト同ジ。諸ノ音便皆漢字音ヲ呼馴タルヨリウツレルモノ也ト云コト。コレヲ以テ決スベシ。(本居宣長『漢字三音考』「音便ノ事」1785刊)

(41) 以上母音五、子音四十二、変音二、濁音二十、半濁音五、合ハセテ七十四音トス、天下ノ広キ、言語ノ多キ、此ヲ以其ノ音ヲ写スニ、記スベカラザル者アルコトナシ、其ノ二ノ変音ハ、古昔無キ所ノ音ニシテ、後世ニ至リ、用ヒ出シタル者ナリ、其ノ・ヤ・ユ・ヨ・ワ・ヲ母音ニ用フルコトト、半濁音トハ、前ニモ説ケル如ク、純然タル日本語ニハ、之ナキコトト知ルベシ、(中根淑『日本文典 上巻』大角豊治郎 1876: 19 ウ・20 オ)(母音：ア行音、子音：カ〜ワ行音、変音：撥音・促音、ヤ・ユ・ヨ・ワ・ヲ母音ニ用フルコト：拗音)

(42) 我国ノ言語ハ、正音五十個ト、濁音二十個ト、半濁音五個ト、都合七十五音ニテ、天下各国ノ言音、金石糸竹ノ声音、移シ取ルベク、言ヒ尽ス可シ、雖然正音五十個ヲ除クノ外、濁音及半濁音ハ、我国固有ノ言音ニアラズ、故ニ変音トス、然バ我国ノ本音ハ五十個ニシテ、左ノ図ノ如シ(山口直吉『語典』文求堂 1888: 2)

(43) 五十音の変化とは言語を組立つる際其音韻の種々に変化転移するものをいふ 即ち左の五種とす／濁音 音便 通音／延約 省略音／是なり(大川真澄『普通教育 日本文典』吉川半七 1893: 7-8)(通音の例：「父 チ、を てゝ」、延約の例：「服部 ハトリ は はたおり」、省略音の例：「明石 アカ〇シ」)

明治後期〜大正期には、西洋の言語研究法の受容により {たとえば、上田万年によって、「フォネティックス」が紹介されるなどして(『国語のため』1895)}、日本語の音声を、(五十音図とは別に)アルファベットで考えることが多くなったが、その一方で、日本語の文法的現象(用言の活用など)を整理するには、五十音図が便利であることから、松下大三郎のように、「声音学的音価」と「文法(学)的音価」とを区別し

て扱おうとする見方なども出てきた (44) (阿久津 2018c: 349-350)。言語音を、精密な音声記述を目指す音声学的な観点とは別に、抽象化して (あるいは、機能的に) とらえようとする学説も起こり (45)、とくに、イギリス音声学派の *phoneme* (音素) の概念は、日本式ローマ字つづり (論者) に、「一音素一字」という理論的背景を与え (46) {内閣訓令「国語ノローマ字綴方」(1937) につながる}、ソシユール言語学に基づくヨーロッパの音韻論 (*phonology*) は、日本の音声研究に、*phoneme* (音韻・音素) という新たな視点を与えた (47)。

(44) 五十音図は音の文法学的行列図であつて声音学的行列図とは違ふ点がある。

文法学と声音学とは音の取扱方を異にする点があるからである。／一、「し」は声音学的に言へば *shi* (*ji*) であつてシァ行である。サ行ではない。サ行のイ形は「スイ」でなければならない。併し其れは言語を離れて音を観察した場合のことである。日本語の「し」をサ行イ列の音即ち *si* と見て取扱い、そいうふ取扱の上に成立して居るのであるから「し」の声音学的音価は *shi* (*ji*) であらうとも文法的音価は *si* 即ちサ行イ列である。(松下大三郎『標準日本文法』紀元社 1924: 11)

(45) 世界各国の言語では色々の音声を使ふ。併しその各国の音声は種類が一定して居る。例へば日本語で標準的の母音としては「ア、イ、ウ、エ、オ」の五つを使ふ。英語の母音は日本語のより多いが、それとても千や万などいふ程多くはない。斯様に或る国の言語で使ふ音声の数がきまつて居るといふが、之は右に述べた抽象音声として考へたからである。若し具体音声として考へ

たらばどうであるかといふに、各個人毎に声の音色^{ネイロ}がちがふし、同一の人でもその場合毎にちがふ音声を出すかも知れない。故に具体音声の種類は殆ど無限といふ位多様であつて、とても数など数へることは出来ない。(神保格『言語学概論』岩波書店 1922: 32)

(46) かくて音声学の進歩は、分析的に見ても、総合的に見ても、ヘボン式綴りの方の示すべき音声論の中途半端な事を明かにし、嘗つては日本式綴り方を攻撃した音声学は、今や却つて日本式の立場を擁護するに至つたのである。それは、分析的方面にのみ勢力を集中した当時の音声学的表記法の理想的原理が一字一音・一音一字 (*one sound one symbol*) 主義であつたのに対して、総合的方面の研究に着目し初めた今日に於ける見解は、小異を捨てゝ大同に就き、多少の差異を認め得る数種の音も一音素に綜合し得るものである事を発見し、かくて国語の正字法に応用せらるべき表記上の理想的原理は、一字一音素・一音素一字 (*one phoneme one symbol*) に従ふべきものである事が確立せられる事となつたのである。(菊沢季生「国字問題の研究 (第八): ローマ字の綴り方の批評 (続、終結)」『学士会月報』516 学士会 1931: 34) (菊沢季生『国字問題の研究』1931 による)

(47) 私が音韻と称する所のものは、言語制度即ち *langue* を組み立ててゐる素材としての音を意味するものでありつまり根本に於てはフランスの社会派の *phonème* に最も近いといふことを、予め呑み込んでおいていたゞきたい。

[中略]「音声」即ち発音運動の外形は、話手が心に懷いてゐる理想即ち「音韻」によつて意味づけられる。凡そ或音声が音韻 A としての価値を持ち得るのは、それが一定の生理的物理的性質（例へば音韻 A に本質的なものとして定まつてゐる若干の属性）を現実具備してゐることによつてではなく、話手の意図、即ち話手がそれを音韻 A の積りで発音してゐるといふ事実によるのである。（有坂秀世「音韻に関する卑見」『音声学協会会報』35 音声学協会 1935: 9）（傍点は、原文では○）

なお、phonology の訳語として「音韻論」が定着したことにより、この研究領域における諸概念に（phonological の訳として）「音韻」が使われるようになった。

4. 言語学（音韻論）における音韻

本節では、言語学（音韻論）における音韻の概要と考え方について見ていく。音韻の歴史については、主として個別言語に関するものであるため、ここでは触れない。

4. 1 言語学（音韻論）における音韻の概要

4. 1. 1 言語学（音韻論）における音韻の定義

日本の言語学（音韻論）の用語としての「音韻」は、一般に、「音素」（母音や子音）を指すが、音素（分節音素）に、アクセント（素）などの「非分節音素」を加えたものを「音韻」とする見方もある（服部四郎などの説）。たとえば、言語学の専門辞典には、次のようにある。

(48) 音韻（おんいん） 英 phoneme, 仏 phonème, 独 Phonem 《音韻》

言語音を不連続・等質的な単位の連鎖・複合と見なして、取り扱いやすいように抽象した概念上の存在。「音声」に対する語。ただし、今日では「音韻」という用語はあまり使われず、むしろ「音素」の方をよく用いる。いずれも同じ意味である。もっとも、人によっては、音素でいわゆる分節音素のみをさし、非分節音素を含めた全体は、音韻という用語で表わす人もいる。（亀井孝ほか編『言語学大辞典 第6巻 術語編』三省堂 1996「音韻」）

また、日本語に関していえば、（先に見たように）モーラ（拍）を、音韻論的な基本単位とする見方もある。

(49) このような「拍」の構造が CV（子音+母音）に限られる言語体系においては、[中略] C 項と V 項とは、独立の「音韻」たることなく、緊密な相互依存の関係に立って、あひよりあひたすけつつ「拍」を識別的な項として機能せしめる同時的な諸契機となつてゐるのである。このやうな C 項と V 項、すなはち C ないし V に分属せしめられる諸項は、もし、なづけるならば、「もどきの音韻（pseudophonemes）」である。そして、「拍」が「音韻等価（phoneme equivalent）」である。（亀井孝「音韻」の概念は日本語に有用なりや」『亀井孝論文集 I 日本語学のために』1971: 166）

4. 1. 2 音韻と音声

ところで、現代の言語学では、音韻論的な概念である「音韻」（音素）と、音声学的な概念である「音声」（単音・異音）とを、厳密に区別しており、音声との対比から、音韻（音素）を説明することも行われる。

(50) 音声学では、どの言語かは関係なく現れた音そのものを記述する。最小の単位は単音 (phone, speech sound) である。記号は決められたものを用い、[] に入れて示す。音韻論では、ある特定の言語において音の違いが意味の違いに関係するかどうかによって最小単位である音素 (phoneme) を設定する。音素の記号はなるべく簡略なものを用い、/ / に入れて示す。(斎藤純男『言語学入門』三省堂 2010: 34)

音韻（音素）と音声（異音）との関係を示す例として、現代日本語（共通語）の音素とその主な異音（モーラレベルの音声表記）を、(拡大) 五十音図に合わせる形で、表 2 に挙げておく {外来語に特有のものは上げていない。音素に関しては、これ以外の説もある（早田 2005: 2-5 など参照）。音声表記は、斎藤 2006: 84-96 などによる}。

音韻（論）と音声（学）に関しては、「相互補完的な統一的方法論を備えた『音声科学』の実現」（『明解言語学辞典』三省堂 2015「音韻論」）が提唱されることがあるが、五十音図のような「音韻図」は、この両者を統合したものとも見ることもできるであろう（これは、後述する中国の音韻学の考え方でもある）。五十音図では、「ア・イ・ウ・エ・オ」の各段と「ア・カ・サ・タ・ナ・ハ・マ・ヤ・ラ・ワ」の各行とが、音韻論的な理論的枠組みを示し、「五十音」（各モーラ）が、それぞれ具体音を表すと見ることができる。

表 2 現代日本語の音素とその主な異音

(母音)母音 子音特記	/a/ (ア段)	/i/ (イ段)	/u/ (ウ段)	/e/ (エ段)	/o/ (オ段)	/ja/ (-ヤ)	/ju/ (-ユ)	/jo/ (-ヨ)
/i/ (ア行)	[a]	[i]	[ur-u]	[e]	[o]			
/k/ (カ行)	[ka]	[ki]	[ku]	[ke]	[ko]	[kja]	[kju]	[kjo]
/g/ (ガ行)	[ga~ya~ŋa]	[gi~yi~ŋi]	[gu~yu~ŋu]	[ge~ye~ŋe]	[go~yo~ŋo]	[gja~yja~ŋja]	[giu~yiu~ŋiu]	[gjo~yjo~ŋjo]
/s/ (サ行)	[sa]	[si]	[su]	[se]	[so]	[sja]	[sju]	[sjo]
/z/ (ザ行)	[dza~za]	[dzi~zi]	[dzur~zu]	[dze~ze]	[dzo~zo]	[dza~za]	[dzur~zu]	[dzo~zo]
/t/ (タ行)	[ta]	[ti]	[tu]	[te]	[to]	[tja]	[tju]	[tjo]
/d/ (ダ行)	[da]	[di]	[du]	[de]	[do]	[dja]	[dju]	[djo]
/n/ (ナ行)	[na]	[ni]	[nu]	[ne]	[no]	[nja]	[nju]	[njo]
/h/ (ハ行)	[ha]	[hi]	[hu]	[he]	[ho]	[cha]	[chu]	[cho]
/b/ (バ行)	[ba~βa]	[bi~βi]	[bu~βu]	[be~βe]	[bo~βo]	[ba~βja]	[bu~βju]	[bo~βjo]
/p/ (パ行)	[pa]	[pi]	[pu]	[pe]	[po]	[pia]	[piu]	[pio]
/m/ (マ行)	[ma]	[mi]	[mu]	[me]	[mo]	[mja]	[mju]	[mjo]
/j/ (ヤ行)	[ja]		[ju]		[jo]			
/r/ (ラ行)	[ra]	[ri]	[ru]	[re]	[ro]	[ra]	[ru]	[ro]
/w/ (ワ行)	[wa]							
/N/ (撥音)	[m][n][ŋ][ɲ][ɳ]など							
/Q/ (促音)	[p̚][t̚][k̚][s̚]など							
/R/ (長音)	[Vː]							

[○～○] は、音声的環境などにより、いずれかが現れることを表す。[V] は、任意の母音を表す。

また、音韻と音声に関しては、一般に、音韻は理論的・抽象的な音であり、音声は具体的・実際の音であるとして対比されるが（阿久津 2018a: 21）、一方で、実用的

な観点から、両者の違いを、音をとらえるスケール（レベル・抽象度）の差と見て、音韻（音素表記）を、最低限区別すべき音の違い（あるいは、許容される発音の範囲）を示す「大まかなとらえ方（表記）」と、音声（表記）を、細かい音の違い（あるいは、詳しい発音）を示す「細かなとらえ方（表記）」と考える見方もある。これは、20 世紀のイギリス音声学派の D. ジョーンズによる、「簡略表記」（音素表記）と「精密表記」（異音表記）の考え方（さらに、さかのぼれば、H. スウィートの考え方）である（51）。これを、簡潔に言えば、「音韻レベルの発音」は「わかってもらう発音」であり、「音声レベルの発音」は「うまい発音」ということになる（黒田 2004: 120-121）。

(51) Different sounds which belong to one phoneme do not distinguish one word of a language from another; failure on the part of the foreigner to distinguish such sounds may cause him to speak with a foreign accent, but it will probably not make his words unintelligible. [1 つの音素に属する異なる音は、ある言語の 1 つの単語を別の単語とは区別しない（意味の違いには関係しない）。外国人がそのような音を区別できないと、外国語なまりで話すことになるかもしれないが、おそらくその言葉が理解されなくなることはない。] (Jones, Daniel. *An Outline of English Phonetics (Ninth Edition)*, Cambridge, W. Heffer & Sons, Maruzen. 1960: 51)

4. 1. 3 現代音韻理論における音韻

ここまでは、個別言語における音素の設定・体系化を中心とする、従来の音韻論（音素論）における音韻を見てきたが、これに対して、現代音韻理論では、言語の普遍性を志向し、（普遍）文法の構成要素としての音韻的法則（音韻規則や制約）の探究を中心とする。その際、生成音韻論などでは、音素ではなく、一般的な「弁別素性」（示差的特徴）{例：[b] +前方、-舌頂、+有声、-継続、-鼻音など（柴谷ほか 1981: 320）} が分析・記述に用いられる（太田 2005: 17-18）。しかし、その場合でも、（便宜的に）「何らかの音韻的最小機能単位を認め、それによって音形を表示する点は共通している」（上野 2004: 227）。たとえば、53 のように、音韻派生における「基底形」（52 参照）を、「音素の連鎖」として、これを音韻表示と見ることもできるだろう。

(52) SPE [生成音韻論の代表的著作 *The Sound Pattern of English* (1968)] に代表される古典理論は、音韻・音声現象を書き換え規則（rewriting rule）によって記述・説明しようとした理論である。書き換え規則とは (ア) のような形式のものであり、一定の基底形にこの主の規則が適用されることで、無限個の音形（表層形）が作り出されると考えてきた。つまり書き換え規則は、(イ) のような「派生」の構図を前提としている。

(ア) $A \rightarrow B / X_Y$

(X と Y に挟まれた環境で A が B に変わる)

(イ) 基底形 → (規則) → 表層形

（窪菌晴夫「音韻論概論」西原哲雄・那須川訓也編『音韻理論ハンドブック』英宝社 2005: 6）（原文の番号は、ア・イに改めた。具体例は、55 参照）

(53) 個々の音声（segment）と言う。斜線 (/ /) で示した音素の連鎖は

具体的な音声表示の基となるわけであるから基底形 (underlying form) と言う。角括弧 ([]) で示したのが音声形 (phonetic form) である。例えば、**can't** の基底形は /kænt/ で、その音声形は [kʰænt̚] である ([ʰ] は氣息音であることを示し、[̚] は鼻音性を表す)。この場合、基底形の /kænt/ が入力 (input) で、その入力に音韻規則 (phonological rule) が適応されて音声形の [kʰænt̚] が出力 (output) として得られると考える。(島岡丘・佐藤寧編『最新の音声学・音韻論：現代英語を中心に』研究社出版 1987: 16)

近年では、音韻・音声現象を、規則ではなく、普遍的な制約によってとらえる「最適性理論」が発展してきているが、この理論でも、基底形を設けることに変わりはない。

4. 2 言語学 (音韻論) における音韻のとらえ方

ここでは、音韻論 (phonology) の主な対象の変遷について触れる。

音素 (phoneme) を主な研究対象とする音韻論が生まれたのは、20 世紀前半のことであるが、phonology という語は、それ以前から使われていた。ヨーロッパでこの語が使われるようになったのは、ほぼ 19 世紀になってからで、このころから、本格的な (言語学的な) 音声研究が始まったようである。*Oxford English Dictionary* (OED Third Edition, March 2006.) によれば、phonology の本来の意味は、“the science of speech sounds and pronunciation, esp. as they occur in a particular language.” [(特定の言語における) 音声と発音の科学。] で、その初出は 1798 年である (なお、「19 世紀以前の文法書では、音^{おん}と文字の区別が曖昧で、音論と称していても、その実は綴り字論であることが多かった」とされる (太田 2005: 16))。

19 世紀後半には、言語音の物理的・生理的・技術的研究である音声学 (phonetics) が盛んになったが、20 世紀前半には、これとは別に、構造主義的な音韻論が起こった。これは、音素 (phoneme) の設定とその体系化を目指す研究で、ここに、科学的地位を得た音韻論が誕生した (太田 2005: 17, 33)。その主なものは、F. de ソシュールの影響を受けた、ヨーロッパのプラーク (プラハ) 学派の音韻論や、アメリカの音素論 (phonemics) である (OED によれば、phoneme の原語である phonème (仏) の初出は、1873 年である)。

日本では、phonology は、明治初年に、西周によって「音声学」と訳されたが、この語はほとんど使われなかったようで、音声研究の分野では、(当初、「音韻学」、「発音学」、「声音学」などと呼ばれ、後に「音声学」で定着した) phonetics が盛んに行われた。音韻論は、明治末年になって、金田一京助によって、H. スウィートの phonology (音声変化の歴史的研究が中心) が「音韻学 (若しくは音韻論)」と訳されたころから、phonetics とは別の音声研究分野として、登場してきたようである (阿久津 2018b: 38, 43-44)。

20 世紀後半になると、アメリカで、音声現象を法則としてとらえる音韻理論が盛んになった。その中心は、N. チョムスキーらの生成音韻論 (generative phonology) で、当初は、「適格な音声形式は、基底にある分節音 (音韻素性の束) の連鎖に、規則を順

序立てて適用することによって派生する」とする理論（分節音韻論、線形音韻論）であったが、その後、韻律を対象とするもの（総称して、非分節音韻論）、分節音と韻律とを別の階層として扱うもの（総称して、非線形音韻論）などの個別の理論が生まれ、さらに、規則ではなく、制約によって最適な音声形式が選ばれるとする理論（最適性理論 optimality theory）へと発展した。

このように、音韻論の主な対象は、音声・発音から音素、音素から適格性に関する条件（音韻的法則）へと変わってきたが、音声学と区別される音韻論が誕生して以来、基になる形（音韻・音素・基底形など）と、実現した形（音声・異音・表層形など）とを分けて考える点は変わっていない。

本節の終わりに、日本語の連濁現象を取り上げて、それが現代音韻理論でどのように説明されるかを見ておく。以下に、本居宣長の解釈（54）とともに、生成音韻論の規則（55）、最適性理論による（制約とその優先順位による）説明（56）を挙げる。54は、濁音（化）は「二言ノ連合」による「連声ノ便」ではないかと述べている。55の a・b・c は、それぞれ、連濁現象に仮定される「一般的な『同化』の書き換え規則」、連濁現象の例、「形態素の同一性」の例である。56は、和語における「鼻音+無声音」に起こる連濁の例の表（タブロー）で、「/sin+te/（死ぬ+て）は、2つの制約（「鼻音の直後には有声音が現れる」、「有聲・無声の入力形式の保持」）のうち、前者が優先されるため、[jinte]（死んで）ではなく、[finde]（死んで）として出力される」ということを表す。}

(54) 一音ノ言ニ濁ル例ナク。又二音三音ヲ合セタル言ニモ。^{ハジメ}首ヲ濁ル例ナシ。

凡テ濁ハタゞ其中下ニノミアリ。然ルニ上ヘ他言ヲ連ネテ合セ云フトキハ。首ヲモ濁ルコト多シ。月ヲモ望月ナドハ云トキハ。ツヲ濁リ。川ヲモ谷川ナドハ云トキハ。カヲ濁ルガ如シ。此例ヲ以見レバ。一言ノウチノ中下ニ濁アル者モ。其本ハ二言ノ連合セルモノナラムカ。其意得ヤスキ者ヲーツニツ例ニイハズ。^{オヂ}祖父^{オバ}祖母ハ大父大母ノ義。柳ハ^{ヤノキ}箭之木。^{マド}窓ハ間戸。袖ハ^{ソデ}衣手。筆

^{フミデ}ハ文手。^{フミイタ}札ハ文板ニテ。皆二言ノ一言ニテナレルニテ。濁音ハ何レモ連声ノ便也。（本居宣長『漢字三音考』「皇国ノ正音」1785刊）

(55) (ア) [-voice] → [+voice] / [+voice] __ [+voice]

- (イ) a. [k] → [g] やま+くち → やまぐち（山口）
- b. [s] → [z] みや+さき → みやざき（宮崎）
- c. [t] → [d] たか+た → たかだ（高田）
- d. [h] → [b] ち+は → ちば（千葉）
- (ウ) a. くち～ぐち（口） b. さき～ざき（崎）
- c. た～だ（田） d. は～ば（葉）

（窪菌晴夫「音韻論概論」西原哲雄・那須川訓也編『音韻理論ハンドブック』英宝社 2005: 6）（[+voice] は有聲、[-voice] は無聲。原文の番号は、ア～ウ

に改めた)

(56) 「鼻音+無声音」: 大和言葉

/sin+te/	鼻音の直後には有声音が現れる	有声・無声の入力形式の保持
☞ [jinde]		*
[finte]	*!	

[* は「制約違反」、*! は「致命的な制約違反」、☞ は「最適な出力形式」。番号は省略。]

(浅野真紀子「音韻論比較」南雅彦編『言語学と日本語教育Ⅴ』くろしお出版 2007: 275)

5. 漢語音韻学における音韻

本節では、伝統的な中国の音韻学（漢語音韻学）における「音韻」について見ていく。

5. 1 漢語音韻学における音韻の概要

5. 1. 1 漢語音韻学における音韻の定義

漢語音韻学における「音韻」は、「⊖又名声韻。漢語語音声母、韻母、声調三要素の総称。⊖音韻学的簡称。」[⊖別名「声韻」。中国語音声の声母・韻母・声調の3要素の総称。⊖「音韻学」の略称。]（『中国語言文字学大辞典』中国大百科全書出版社 2007「音韻」とされる。つまり、中国語音の体系や構造、および、それに関する学問が「音韻」と呼ばれる {中国語は、基本的に、1形態素=1音節で、これが漢字1字で表される。中国語の1音節は、声母（頭子音）、韻母（声母に続く、母音を中心とする部分）、声調（音の高低）で構成される。韻母には、主母音（韻腹）のほかに、主母音の前に「介音」（韻頭）、主母音の後に「韻尾」が付く場合もある。なお、「主母音（+韻尾）」が、詩で押韻するときの「韻」となる}。「音韻」には、歴史的な観点が伴い、学問上の著作を指すこともある（57）。

(57) 音韻／又称“声韻”，指一種語言共時或歷時的聲音組織。就漢語說，通常用来総称歴史語音的声、韻、調三部分。文献所記，也可指称自然音響或詩文音律。如“施之金石，則音韻和諧”（《晋書・摯虞伝》）；“一簡之内，音韻尽殊”

（《宋書・謝靈運伝論》）。而像陸法言《切韻・序》的“論及音韻”“周思言音韻”、顏之推《顏氏家訓・音辞篇》的“音韻鋒出”，孫緬《唐韻・序》的“文字聿興，音韻乃作”等的“音韻”，則是指語音或韻書而言。[音韻 また「声韻」と称す。ある言語の共時的、あるいは通時的な音声組織を指す。中国語については、ふつう歴史的音声の声母・韻母・声調の3部分を総称するのに用いる。文献に記されたものでは、自然の音響や詩文の音律などを指してい

うこともある。たとえば、「^{これ}之を金石に施せば、則ち音韻和諧す」（『晋書・摯

虞伝』）、「一簡の内、音韻 ^{ことごと}尽 ^{こと}く殊なり」（『宋書・謝靈運伝論』）など。また、

陸法言の『切韻・序』の「音韻に論及す」、「周思言『音韻』、顏之推『顏氏

家訓・音辞篇』の「音韻鋒出す」、孫緬『唐韻・序』の「文字筆に興り、音韻

乃ち作る」などのような「音韻」は、音声、あるいは韻書を指しているものである。] (葛本義主編、殷煥先審訂『実用中国語言語学詞典』青島出版社 1993「音韻」)

このような(中国語の)「音韻」に関する研究が「漢語音韻学」(声韻学)であるが、その特徴は、「分析漢字或漢語裏所含“声”“韻”“調”三種元素，而講明他們的發音和類別，並推究他們的相互關係和古今流變」[漢字、あるいは中国語のうちに含まれる「声母」・「韻母」・「声調」を分析して、それらの発音と類別とを明らかにし、また、それらの相互関係と歴史的変遷とを探究する] (羅 1978: 157) 点にある。つまり、漢語音韻学とは、「漢字」を基に、(中国語における)「発音」(「音値」と呼ばれる。日本語では「音価」。以下、「音値」を使う)と「類別」(「音類」と呼ばれる)との関係を(歴史的に)探る研究といえる。漢語音韻学では、「音類」が、(音韻論の「音素」に当たるような)基本的な単位となる(58)。

(58) 從普通話語言学的角度看，如果說語音学研究的基本單位是音素，音位学研究的基本單位是音位，音系学研究的基本單位是區別性特徵的話，則漢語音韻学研究的基本單位就是音類，而這正是漢字的特点賦予的。／從漢語漢字的特点出發，音類與音值的關係可說是漢語音韻学研究的一個永恒的主題，這是別的語言的音韻研究所沒有，也不可能有的。[一般言語学の観点から見て、音声学研究の基本単位が単音であり、音素論研究の基本単位が音素であり、(生成)音韻論研究の基本単位が弁別素性であるというなら、漢語音韻学の基本単位は音類であり、これはまさに漢字の特徴のもたらしたものである。中国語・漢字の特徴からいって、音類と音値の關係は、漢語音韻学研究の永遠のテーマであるというべきで、これはほかの言語の音韻研究にはなく、また、あるはずのないものである。] (藩文国「漢語特色的音韻学研究」中国音韻研究会・石家莊師範專科學校編『音韻論叢』12-18 齊魯書社 2004: 15) {中国語では、主に、phonemics を「音位学」、phonology を「音系学」(音位学)、phone を「音素」、phoneme を「音位」と訳す}

音類は、(時代や地域を越える)漢字の共通性に基づく類別で、必ずしも共時的な1言語(方言)体系内に限られるものではない。これを、音韻論における音素や基底形と比べると、表3のようにまとめられる(例は、北京大学 2004: 133、林・王 1992: 201、大島 2011: 122-123、王 1960: 54 などによる)。

表3 音素・基底形・音類

学説	考え方	現代北京音(ほか)の例
音韻論 (音素論)	音素→ (音声的環境などによって)→異音	/k/ ([i] [y] 以外の前で) [k] (「高 gao」/kau/ [kɑu]) ([i] [y] の前で) [tɕ] (「交 jiao」/kiau/ [tɕiau])
生成音韻論	基底形→	k→tɕ / __ [-consonantal (子音), +high (高)]

	(音韻規則によって) → 派生形	
漢語音韻学	音類→ (時代・地域によって) → 音値	見母 (牙音・清) (北京で) (開口呼・合口呼の前で) [k] (齊齒呼・撮口呼の前で) [tɕ] {蘇州 (吳方言) で} [k] {厦門 (閩方言) で} [k] {広東 (粵方言) で} [k (ʷ)] {梅県 (客家方言) で} [k (w)]

[tɕ] の音韻論的解釈については、ほかに、/tɕ/、/ts/、/tɕ/ という説がある。

「見母 (牙音・清)」は、声母の音類の 1 つ (59 参照)。

「合口呼」は [u (ɔ)]、「齊齒呼」は [i (ɔ)]、「撮口呼」は [y (ɔ)]、「開口呼」はそれ以外の韻母。

なお、音類を、日本語における五十音図のように、図表にしてまとめて示したものを「韻図」(等韻図) といい (その現存最古のものが『韻鏡』である)、韻図に基づく音韻学を「等韻学」と呼ぶ (大島 2011: 89-90)。

5. 1. 2 音類と音値

ここでは、中国中古音の音類を中心に見ていく (日本漢字音との対応も示す)。ここでいう「中古音」とは、隋代の韻書、『切韻』(601) に反映された音韻体系のことである (『切韻』は、原本が失われたため、代わりに、宋代に増訂された『広韻』(1008) が主に使われる)。中古音は、「中国語の音韻体系として今日からほぼ完全に知ることのできる最古のもの」で、「それ以前の音韻史を探る基点」、「それ以後の音韻史を記述するための出発点」となるものである (平山 1967: 122, 112)。以下、声母・韻母・声調に分けて、その音類を見ていく。

声母 (頭子音) の音類については、『韻鏡』(唐末～五代ごろの成立) などに見られる「三十六字母」(36 種類の声母を、それぞれ別の文字で代表させたもので、唐末の僧・守温が考案したと伝えられる) が有名である。ただし、これには、唐代に起こった音韻変化が反映されているため、中古音の音韻体系としては、これに修正を加えたものが使われることが多い。三十六字母は、「幫・滂・並・明 (重唇音)、非・敷・奉・微 (輕唇音)、端・透・定・泥 (舌頭音)、知・徹・澄・娘 (舌上音)、精・清・從・心・邪 (齒頭音)、照・穿・牀・審・禪 (正齒音)、見・溪・群・疑 (牙音)、曉・匣・影・喻 (喉音)、来 (半舌音)、日 (半齒音)」であるが、中古音の声母には、このうちの輕齒音がなく (輕唇音は、唐代に重唇音から分化した)、正齒音が、「莊・初・崇・生・俟」と「章・昌・船・書・常」の 2 系列に分かれていたとされる (推定音値や、対応する日本漢字音は、59 参照)。

(59) 中古 (隋唐) 声母表 (三十六字母)

[清]	[次清]	[濁]	[清濁]	[清]	[次清]	[濁]	[清濁]	[清]	[次清]	[濁]	[清濁]	[清]	[次清]	[濁]	[清濁]	[清]	[濁]	[清]	[清濁]	[清濁]	[清濁]	[清濁]	
見	溪	群	疑	端	透	定	泥	幫	滂	並	明	精	清	從	心	邪	曉	匣	影	喻	來		
k	k'	g	ŋ	t	t'	d	n	p	p'	b	m	ts	ts'	dz	s	z	h	ɦ	ʔ	j	l		
				舌頭				重唇				[齒頭]											
				知	徹	澄	娘	非	敷	奉	微	照	穿	牀	審	禪							日
				t	t'	ɕ	ɲ	f	f'	v	ɰ	[正齒]										n	

					舌上				輕唇				〔莊 初 崇 生 (俟)〕 tʂ tʂʰ dʒ ʂ ʐ 〔章 昌 船 書 (常)〕 tʃ tʃʰ dʒ ɕ z										
	牙 音				舌 音				唇 音				齒 音					喉 音				半舌	半齒
呉音	カ	カ	ガ	ガ	タ	タ	ダ	ナ	ハ	ハ	バ	マ	サ	サ	ザ	サ	ザ	カ	ガ	ア	ヤ	ラ	ナ
漢音	カ	カ	カ	ガ	タ	タ	タ	ダ	ハ	ハ	ハ	バ	サ	サ	サ	サ	サ	カ	カ	ア	ヤ	ラ	ザ

〔清音は無気無声音、次清音は有気無声音（‘は有気を表す）、濁音は有声音、清濁音は鼻音など。

片仮名は、吳音・漢音の（主な）行を表す（半齒音は、「ニャ」・「ジャ」を改めた）。

上には「ワ」がないが、ワ行音は、「匣」（吳音のみ）・「影」・「喻」に現れる。]

（小川環樹ほか編『新字源 改訂新版』角川書店 2017: 1617）

次に、韻母については、その種類が大変多いため {たとえば、『広韻』の韻（韻目）の総数は 206}、音類を概観するのに、「摂」という概念がよく使われる（この名称は、宋代以降のものである）。「摂」とは、「音が近い韻をいくつかずつまとめたもの」で、「韻尾が共通である韻を主母音の相対的な広・狭によって 2 摂ずつにまとめ」たものである（平山 1967: 130）。一般には 16 摂（16 分類）が使われることが多いが、ここでは、それをさらにまとめた 14 摂を挙げる。日本漢字音の漢音形も、合わせて載せておく（表 4）（望月 1982: 968、沖森 2015: 37 などによる）。

表 4 14 摂

韻尾 主母音	-	-i	-u	-m	-n	-ŋ		入声			
						前寄り	後寄り	-p	-t	-k	
										前寄り	後寄り
a 系	果摂 a ㊶・㊷ (歌写)	蟹摂 ai ㊶イ・㊷イ (会弟)	効摂 au ㊶ウ・㊷ウ (高小)	咸摂 am ㊶ン・㊷ン (三店)	山摂 an ㊶ン・㊷ン (單言)	梗摂 aŋ ㊶ウ・㊷イ (黃京)	宕摂 aŋ ㊶ウ・㊷ウ (港強)	咸摂 ap ㊶フ・㊷フ (合葉)	山摂 at ㊶ツ・㊷ツ (達鉄)	梗摂 ak ㊶ク・㊷キ (作石)	宕摂 aq ㊶ク・㊷ク (学葉)
	遇摂 ə ㊶・㊷・㊸・㊹ (古句)	止摂 ai ㊶・㊷イ (気水)	流摂 əu ㊶ウ・㊷ウ (走九)	深摂 əm ㊶ン (音今)	臻摂 ən ㊶ン・㊷ン・㊸ン ㊹ン・㊺ン (村近)	曾摂 əŋ ㊶ウ・㊷ウ (能乗)	通摂 əŋ ㊶ウ・㊷ウ・㊸ウ ㊹ウ (工中)	深摂 əp ㊶フ (急習)	臻摂 ət ㊶ツ・㊷ツ・㊸ツ ㊹ツ・㊺ツ (骨一)	曾摂 ək ㊶ク・㊷ク (特食)	通摂 əq ㊶ク・㊷ク・㊸ク ㊹ク・㊺ク・㊻ク (読育)

16摂の場合、果摂が果摂と仮摂とに、宕摂が宕摂と江摂とに分かれる。

音声記号は、中古音の音類としての、ごく大まかな推定音値を示す。（ ）内は例字。

-m, -n, -ŋ は、それぞれ、-p, -t, -k（入声）と対応し、対応するものどうしは、同じ摂に属する。

-ŋ の 2 種は、ŋ/ŋ 以外に、ɲ/ŋ, ɲ/ŋʷ などと、-k の 2 種は、k/q 以外に、c/k, k/kʷ などと表記される（太田 2013: 61-63）。

片仮名は、日本漢字音の主な漢音形（字音仮名遣い）。㊶～㊺は各段の音を、㊶～㊹はヤ行音・拗音を表す。

声調の音類については、中古音の四声（平声・上声・去声・入声）が基準となっている。現代中国語の各方言の声調は、この四声を基に分類される。現代中国語の主要方言（7 地区）の声調の音類（調類）と音値（調値）を挙げる（60）。

（60）主要方言声調対照表

方言区	古調類	平		上			去			入					声調数
	例字	詩 天	時 田	使 草	老 米	是 近	試 蓋	事 共	識 筆	各	六 麦	食 白	調值		
		通 風	同 逢	古 短	五 有	婦 稻	放 到	飯 盜	竹 百		物 菓	読 服			
	地名	[清·次清]	[濁·清濁]	[清·次清]	[清濁]	[濁]	[清·次清]	[濁·清濁]	[清·次清]	[清·次清]	[清濁]	[濁]			
北方方言	北京	陰平 55	陽平 35	上声 214			去声 51			[陰平·陽平·上声·去声]					4
吳方言	蘇州	陰平 44	陽平 24	上声 52	[陽去]		陰去 412	陽去 31	陰入 4		陽入 23		7		
湘方言	長沙	陰平 33	陽平 13	上声 41		[陽去]	陰去 55	陽去 21	入声 24					6	
贛方言	南昌	陰平 42	陽平 24	上声 213		[陽去]	陰去 45	陽去 21	陰入 5		陽入 21		7		
客家話	梅県	陰平 44	陽平 11	上声 31		去声 52			陰入 1		陽入 5		6		
閩方言	廈門	陰平 55	陽平 24	上声 51		[陽去]	陰去 11	陽去 33	陰入 32		陽入 5		7		
粵方言	広州	陰平 53 55	陽平 21	陰上 35	陽上 13		陰去 33	陽去 22	上陰入 5	下陰入 33	陽入 22 2		9		

[各「方言区」につき、1箇所のみ挙げた。清・次清・濁・清濁については、59 参照。]

調値の数字は、5～1 の順に、高音～低音を表す（例：35 は「中→高」の上昇調）。

なお、中古音（六朝～唐代中頃）の調値は、平声 31（声母清音）・11（声母濁音）、上声 35、去声 24、

入声 4（声母清音）・2（声母濁音）などと推定されている（平山 2016: 191）。]

（北京大学中文系現代漢語教研室編『現代漢語 重排本』商務印書館 2004: 84-85）

なお、日本語のアクセントにも、このような「類」が見られる。その発見者の金田一春彦は、「今、現在の諸方言のアクセントを比較してみると、甲・乙・丙・丁……というような語の群、——しかも、意義において、また語源において全然関係のない語の群が、一類をなして、A 方言ではそろって A の型に属しており、B 方言ではそろって B の型に属しているという事実がある。」「アクセントというものは、ある型に変化が起これるときは、その型に属する語は、全部揃って同じ方向に変化すると考えられる。」と述べている（金田一 1974: 57, 61）。

以上見てきたような音類は、（現代の）方言（音）や漢字音どうしの対応を見るのに便利である。仮に、ある方言（漢字音）において、中古音にあった、ある特徴が失われてしまっている、中古音や、その特徴の残っている方言（漢字音）との間には、何らかの対応が見られるのがふつうである。たとえば、現代中国語は、多くの地域において、中古音の濁音（59 参照）が無声音化し、入声音（表 4 参照）の韻尾が弱化・消失してしまっているが（吉川 2017: 55）、そういった方言（漢字音）でも、旧濁音字・旧入声字には、その痕跡を示す音値が見られることがあり、それが、中古音や、その特徴が残っている方言（漢字音）と対応する場合が多い。この項の最後に、その例として、中古音の声母の音類である「濁音」・「清濁音」を取り上げ、これらが、現代中国語（北方方言）、および、日本漢字音（漢音・呉音）でどのような音値になっているかを示してみる（表 5）（阿久津 2017a: 100 による）。

表 5 から、中古音の濁音は、日本漢字音では、呉音形に濁音として現れ、現代中国語（北方方言）では、声調に第 2 声・第 4 声として現れていることがわかる（ただし、現代中国語の第 4 声には、もともと去声であったものも含まれる。60 参照）。こうい

ったものは、言語学習の参考にもなると思われる。

表5 中古音の濁音・清濁音（音類）と現代中国語・日本漢字音（音値）

中古音 (音類)		現代中国語（北方方言） (音値)		例字	中古音 (音類)		日本漢字音（音値） 呉音 漢音		常用漢字（音）における 音形の割合
濁音	平声	陽平声（第2声 35） 有気無聲音		勤従頭平	濁音	濁音 (ガ・ザ・ ダ・バ行)	清音 (カ・サ・ タ・ハ行)	両音形（呉音・漢音） 60字（11%） 濁音形（呉音）のみ 164字（31%） 清音形（漢音）のみ 287字（54%） その他 21字（4%）	
	上声	去声（第4声 51） 無気無聲音		上静弟部					
	去声	去声（第4声 51） 無気無聲音		現自地病					
	入声	陽平声（第2声 35） 無気無聲音など		学食読白					
清濁音	平声	陽平声 (第2声 35)	m [m]・ n [n]・ l [l]・ r [ɹ]・ ゼロ声母	言人男文	清濁音 (鼻音のみ)	明母	マ行音	バ行音	両音形（呉音・漢音） 28字（17%） 鼻音形（呉音）のみ 68字（41%） 濁音形（漢音）のみ 57字（34%） その他 14字（8%）
	上声	上声 (第3声 214)		眼女軟母		泥母 (・娘母)	ナ行音	ダ行音	
	去声	去声 (第4声 51)		外内二万		日母	ナ行音	ザ行音	
	入声	去声 (第4声 51) など		業若日物		疑母	ガ行音	ガ行音	

声調の数字については、60 参照。

明母・泥母（+鼻音韻尾）には、日本漢音がマ行音のもの（名・明など）、ナ行音のもの（寧など）もある。

日本漢字音の認定は一定しないため、「常用漢字（音）における音形の割合」は、概数である。

5. 2 漢語音韻学における音韻の歴史

先に述べたように、中国語の音韻史を探る場合には、中古音 {狭義には、『切韻』の基礎になった方言音、広義には、六朝後期～唐末・宋初の音} の体系が基準となる（平山 1967: 112）。それ以前、あるいは、それ以後の中国語（方言）の音韻体系については、中古音と比べて、音類がどう違うか（同じか）、音値がどう違うか（同じか）を中心に探究が進められる {周辺諸国（日本・朝鮮・ベトナム等）の漢字音についても、同様である}。その詳細については、専門書や概論書に譲ることにして、ここでは、その大まかなところを見るため、韻母を例にとりて、先に挙げた中古音の 14 摂（表 4）を中心に、上古音・近世音（近古音・近代音）・現代音を併せて示したい。

上古音は、周・秦・漢の音韻で、その主な言語資料は、『詩経』などの韻文の押韻や、形声文字の諧声音符などである。上古音の韻部（韻母の音類）の分類は、明末・清初の顧炎武によって始められたが、「韻部分析が詳密となるためには、ずいぶん長い年月を要し、今日では 30 数部に区分されるように」なっている（藤堂 1967: 42）。上古韻部の分類には、諸説あるが、ここでは、王力（1972: 166）の 29 部説を取り上げておく。

近世音は、元・明の音韻で、その主な言語資料は、『中原音韻』（1324）である。『中原音韻』は、元曲（北曲）の押韻のために作られた韻書で、ここから、当時の北方方言の音韻体系がうかがえる。ここでは、その 19 韻部を取り上げる。現代音については、京劇の歌詞などの押韻に用いられる「十三幟」（十三道大幟）を取り上げる {この

13 韻部は、1918 年に中華民国教育部から正式に公布された「注音字母」（注音符号）の韻母にほぼ対応する。表 6 に、王力の 29 部、中古音の 14 摂、『中原音韻』の 19 韻部、現代の「十三韻」（13 韻部）を並べて挙げておく（望月 1982: 966, 977、王 1972: 70, 166、藤堂 1967: 51、藤堂 1980: 109-111, 301 などによる）。

表 6 上古音～現代音の韻母の音類

上古音 王力の 29 部						中古音 14 摂				近世音 『中原音韻』 19 韻部						現代音 「十三韻」 13 韻部					
魚	a	支	e	之	ə	果	a	遇	ə	家麻	a	歌戈 車遮	ə	魚模	u y	麻沙	a ɣ	梭波	ə ɛ ɛ ɛ	姑蘇 衣期	u ɣ y u i i
歌	ai	脂	ei	微	əi	蟹	ai	止	əi	皆来	ai	齊微	əi		i	懷来	ai ɣ	灰堆	əi ɣ		
侯	o	宵	au	幽	əu	効	au	流	əu	蕭豪	au	尤侯	əu			遙迢	au ɣ	由求	əu ɣ		
談	am	—		侵	əm	咸	am	深	əm	監咸 廉纖	am	侵尋	əm			言前	an ɣ	人辰	ən ɣ		
元	an	真	en	文	ən	山	an	臻	ən	寒山 桓歡 先天	an	真文	ən								
陽	aŋ	耕	eŋ	蒸	əŋ	梗	aŋ	曾	əŋ	江陽	aŋ	庚青 東鍾	əŋ			江陽	aŋ ɣ	中東	əŋ ɣ		
東	oŋ	—		—		宕	aŋ	通	ən												
葉	ap	—		緝	əp	咸	ap	深	əp												
月	at	質	et	物	ət	山	at	臻	ət												
鐸	ak	錫	ek	職	ək	梗	ak	曾	ək												
屋	ok	葉	au k	覺	əu k	宕	aŋ	通	əŋ												

推定音値は、上古音・現代音は、王（1972: 166, 70）、中古音・近世音は、望月（1982: 968, 977）による。
音声表記は、元のものを一部変えてある。介音は省略した（同じ枠内にある複数の韻部は、主に介音が異なる）。
現代音は、（音素表記に近い）簡略化した音声表記を用いている（注音符号を付けた）

これらの音類は、各音韻体系の韻母について、（介音の有無やその種類、主母音の変種などの）細かい違いを捨象して、大まかにまとめたものである。音類には、精密な音声観察（調査）に基づく、細かい分類から、大まかな枠組みを示す、大きいくりまでである。前者は、音声表示が精密なぶん、狭い時代・狭い地域の言語（方言）体系にしか当てはまらないが、後者は、音声表示が大まかなぶん、広い時代・広い地域の言語（方言）体系に応用することができるものである。

5. 3 漢語音韻学における音韻のとらえ方

漢語音韻学における音韻のとらえ方には、歴史的に見て、大きく 2 つの方向が見られる。1 つは、①分析対象を、音類中心から音値を重視するものへと転換していく方向であり、もう 1 つは、②音声の分析を、簡略なものから精密なものへと、精緻化していく方向である。

①については、20 世紀における、(とくに、スウェーデンの言語学者、カールグレンによる) 中国語音声研究への西洋言語学の手法の導入が画期になったとされる。カールグレン (Bernhard Karlgren、中国名「高本漢」) は、ヨーロッパの比較言語学の手法を用いて、中国語の中古音 {『切韻』の音韻体系 (カールグレンは、これを隋代長安音と見た)} を再構し、『中国音韻学研究』{原著 (フランス語) 1915-1926、中国語訳 1940} という大著にまとめた (この中国語訳では、valeur を「音値」、phonème を「音・音類」と訳している)。この研究の影響は絶大で、その影響のもと、現代 (漢語) 音韻学が起こったといわれる。伝統音韻学 (古くは、「音韻」、あるいは、「音韻之学」と現代音韻学との大きな違いは、伝統音韻学では、もっぱら音類の追究が行われていたのに対して、現代音韻学では、音値が重要視されるようになった点にある (61)。

(61)

	旧典範 [伝統音韻学]	新典範 [現代音韻学]
定位	伝統語文学 [伝統言語学]	歴史言語学 [歴史言語学]
任務	帰納古音音類、掌握音韻通転之条理、作為通読古代經典之工具 [古音の音類を帰納し、音韻の通転 (変化) の条理を掌握し、古代の經典を通読する道具とする]	建構古代音韻系統、探究語言歷時演化規律 [古代音韻体系を構築し、言語の通時的進化の法則を探究する]
材料	以書面文献為主 [書き言葉の文献を主とする]	書面文献与口語語料相互結合 [書き言葉の文献と話し言葉の資料の組み合わせ]
方法	求音類——帰納韻部、系聯反切 [音類を求める: 韻部を帰納し、反切を系聯する]	求音値——歷史比較、内部擬構 [音値を求める: 歷史比較、内的再構を行う]
観点	歷時 [通時]	泛時 (共時+歷時) [汎時 (共時+通時)]
符号	漢字 [漢字]	國際音標 [國際音声記号]

(王松木「金針如何度与人?: 論声韻学之課程設計与教材教法」中華民国声韻学学会『声韻論叢』15 台湾学生書局 2007: 73)

②については、伝統音韻学においても、音類の分析を精緻化する (細分化する) 方向で研究が進展していた。それは、西洋言語学が伝来する以前に、すでに高いレベルに達していたが、具体的音声の記述方法がなかったことがその発展を阻んだとされる。伝統音韻学において、漢字音の最小構成要素を求める研究は、当初の声母と韻母とを2分する段階 {漢字1字の音を、声母と韻母に分けて、漢字2字で表す方法をとる段階 (これを「反切」という。例: 「東」 t un = 「徳紅」 tək + yun)} から、3分段階→4分段階→5分段階へと進んだ (62)。

(62)

	[反切時期]		[韻書時期]		[等韻學成立の時期]				
字：	聲韻		調		調				
			聲	韻	聲	介	韻		
	[明 清 時 期]								
字：	調				或	調			
	聲	韻				聲		韻	
		韻頭	韻腹	韻尾		聲母	介音	韻腹	韻尾

〔「声」は声母、「韻」は韻母、「調」は声調、「介」は介音を表す。
各用語について、現代中国語の miàn (面) を例にしてみると、m が「声母」、ian (iàn) が「韻母」、
韻母のうちの i が「介音」(韻頭)、a が「韻腹」、n が「韻尾」、` で表される下降調が「声調」となる。〕
(施向東「等韻学与音位学」中国音韻学研究会編『中国音韻学』南京大学
出版社 2008: 288-289)

なお、伝統音韻学の発展にも、外来文化の影響が少なからず認められるようで、とくに古代インドの音韻学(声明、悉曇学)の影響が指摘されている。たとえば、現代音韻学を確立・発展させた学者の1人である羅常培(羅莘田)は、「印度梵語」の「最大の貢献」として、「字母」と「等韻」の創造を挙げている(63)。

(63) 所謂「等韻」就是模仿梵文悉曇章的体制，以声為經，以韻為緯，把切韻的音系總撰為若干轉図；換言之，就是悉曇化的切韻音綴表(Syllabary)。它的作用和現代国音字母的拼音表跟日本語的「五十音図」是完全一樣的。[いわゆる「等韻」とは、梵語の『悉曇章』(字母表)の体裁を模倣して、声母を経(縦列)とし、韻母を緯(横列)として、『切韻』の音系をまとめて、いくつかの「轉図」(図表)を作ることである。言い換えれば、悉曇(梵語字母)化した『切韻』の音節表(syllabary)である。その役割と、現代の国音(中国語標準音)字母の綴り字表と日本語の「五十音図」とは、まったく同じものである。](羅莘田「中国音韻学的外来影響」『東方雜誌』32・4(商務印書館 1935: 36)(原文の傍線は省略した)

6. おわりに

以上見てきたように、音韻は、いずれの研究領域においても、単に音声の基本的単位を意味するだけではなく、その背景にある構造や体系を包括するものとなっている。その体系や構造とは、日本語学においては、五十音図であり、言語学(音韻論)においては、音素の体系(構造)、音韻規則、普遍的な制約であり、漢語音韻論においては、音類である(表7)。これらには、何らかの点において、普遍的なものを求める思想が見られるようである(阿久津 2020b: 2)。

表7 音韻の基本的単位とその背景にある体系や構造

領域		基本的単位	背景にある体系や構造
日本語学		モーラ	五十音図
言語学(音韻論)	音素論	音素	音素の体系(構造)
	生成音韻論	弁別索性	音韻規則
	最適性理論		普遍的な制約
漢語音韻学		声母・韻母・声調	音類

【参考文献・引用文献】

阿久津智(2016)「現代日本語における「音韻」の意味」『立教大学日本語研究』23 立教大学日本語研究会 22-39

- 阿久津智 (2017a) 「漢語音韻学と日本語漢字学習」『拓殖大学日本語教育研究』2 拓殖大学日本語教育研究所 81-104
- 阿久津智 (2017b) 「「音韻」の語誌」『拓殖大学 語学研究』136 拓殖大学言語文化研究所 177-201
- 阿久津智 (2017c) 「明治期の日本文典における音韻」『立教大学日本語研究』24 立教大学日本語研究会 23-41
- 阿久津智 (2018a) 「音韻と日本語学習」『拓殖大学日本語教育研究』3 拓殖大学日本語教育研究所 19-42
- 阿久津智 (2018b) 「「音韻論」と「音声学」の語誌」『立教大学日本語研究』25 立教大学日本語研究会 35-53
- 阿久津智 (2018c) 「明治後期・大正期の口語文典における音韻」沖森卓也編『歴史言語学の射程』三省堂 341-353
- 阿久津智 (2019) 「「音」と「音韻」」『立教大学日本文学』121 立教大学日本文学会 233-247
- 阿久津智 (2020a) 「明治前期の「音韻」」『拓殖大学日本語教育研究』5 拓殖大学日本語教育研究所 1-29
- 阿久津智 (2020b) 「音韻の実用性と普遍性」『立教大学日本語研究』26 立教大学日本語研究会 2-15
- 阿久津智 (2020c) 「言語音を表す「音韻」」『拓殖大学 語学研究』143 拓殖大学言語文化研究所 1-24
- 上野善道 (2004) 「音の構造」風間喜代三・上野善道・松村一登・町田健『言語学 第2版』東京大学出版会 195-250
- 王育徳 (1960) 「中国五大方言の分裂年代の言語年代学的試探」『言語研究』38 日本言語学会 33-105
- 王力 (1972) 『漢語音韻』中華書局 (香港) (1963 初刊)
- 大島正二 (2011) 『中国語の歴史：ことばの変遷・探究の歩み』大修館書店
- 太田斎 (2013) 『韻書と等韻図Ⅰ』神戸市外国語大学外国語学研究所
- 太田聡 (2005) 「SPE 理論とそれ以前の音韻論」西原哲雄・那須川訓也編『音韻理論ハンドブック』英宝社 15-34
- 沖森卓也 (2015) 「語種としての外来語」沖森卓也・阿久津智編『ことばの借用』朝倉書店 33-44
- 金田一春彦 (1974) 『国語アクセントの史的研究：原理と方法』塙書房
- 黒田龍之助 (2004) 『はじめての言語学』講談社
- 斎藤純男 (2006) 『日本語音声学入門 改訂版』三省堂
- 柴谷方良・影山太郎・田守育啓 (1981) 『言語の構造：理論と分析 音声・音韻篇』くろしお出版
- 藤堂明保 (1967) 「上古漢語の音韻」牛島徳次・向坂順一・藤堂明保編『中国文化叢書 1 言語』大修館書店 33-89
- 藤堂明保 (1980) 『中国語音韻論：その歴史的研究』光生館 (1957 初刊)
- 早田輝洋 (2005) 「諸言語の音韻と日本語の音韻」早田輝洋編『朝倉日本語講座 1 世界の中の日本語』朝倉書店 1-22
- 平山久雄 (1967) 「中古漢語の音韻」牛島徳次・向坂順一・藤堂明保編『中国文化叢書 1 言語』大修館書店 112-166
- 平山久雄 (2016) 「唐詩の韻律：漢文訓読の彼方」『東京大学中国語中国文学研究室紀要』東京大学文学部中国語中国文学研究室 183-201
- 北京大学中文系現代漢語教研室編 (2004) 『現代漢語 重排本』商務印書館 (初版 1993)
- 馬渕和夫 (1993) 『五十音図の話』大修館書店

望月真澄（1982）「中国の言語と文字」『広漢和辞典 索引』961-981

吉川雅之（2017）「中国漢字音」沖森卓也・笹原宏之編『漢字』朝倉書店 43-55

羅常培（1978）「京劇中の幾個音韻問題」『羅常培語言學論文選集』九思出版社（初出 1935）157-176

林燾・王理嘉（1992）『語音學教程』北京大學出版社

【参考サイト】

「Oxford 英英辞典」Oxford University Press

<https://www.oed.com>

「漢籍電子文獻資料庫」中央研究院歷史語言研究所

<http://hanchi.ihp.sinica.edu.tw/ihp/hanji.htm>

「国立国会図書館サーチ」国立国会図書館

<https://iss.ndl.go.jp/>

「国立国会図書館デジタルコレクション」国立国会図書館

<https://dl.ndl.go.jp>

「ジャパンナレッジ」ジャパンナレッジ

<https://japanknowledge.com>

「少納言「現代日本語書き言葉均衡コーパス」」国立国語研究所

<https://shonagon.ninjal.ac.jp/>

「中国哲学書電子化計画」中国哲学電子化計画

<https://ctext.org/zh>

「BCC 語料庫」北京語言大学

bcc.blcu.edu.cn

「横浜国立図書館蔵書検索ページ」横浜国立図書館

<https://opac.lib.city.yokohama.lg.jp/opac/>